

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
6 5	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Smoking, drinking and colorectal cancer in Hong Kong Chinese: a case-control study. 香港在住の中国人における喫煙および飲酒と結腸直腸癌:症例対照研究	
執筆者	
Ho JW, Lam TH, Tse CW, Chiu LK, Lam HS, Leung PF, Ng KC, Ho SY, Woo J, Leung SS, Yuen ST.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Cancer. 2004;109:587-97.	
キーワード	
結腸直腸癌・飲酒量・飲酒頻度・断酒期間・症例対照研究	
要 旨	
<p>(目的) 喫煙や飲酒の結腸直腸癌への影響は、専門家の間でも見解が異なる。本研究において、香港在住の中国人における喫煙や飲酒と結腸直腸癌の関係を明らかにする。</p> <p>(方法) 病院入院患者集団において、1998年4月から2000年3月までに行われた症例対照研究である。新規に結腸直腸癌(腺癌)と診断された患者を症例とし、性・年齢が一致し、消化器疾患および悪性腫瘍のない入院患者を対照とした。生涯の喫煙や飲酒の程度と結腸直腸癌の関係を調べるための調査票により聞き取り調査を行った。822名の症例患者および926名の対照患者の調査を行った。</p> <p>(結果) 診断時点での常習喫煙によって直腸癌の危険は増加し、その調整オッズ比(95%信頼区間)は1.44(1.001-2.06)であった。常習喫煙者では、喫煙期間の長さによって直腸癌の危険は増加させる傾向があった(<math>p=0.038</math>)。診断時点での常習飲酒によって結腸直腸癌の危険は増加し、その調整オッズ比(95%信頼区間)は1.42(1.09-1.85)であった。診断時点および過去の飲酒者の4回/週以上の飲酒および4単位/週以上の飲酒を定常的にすることによっても結腸直腸癌の危険は増加した。さらに、断酒期間の増加によって結腸直腸癌の危険は減少する傾向があった(<math>p=0.006</math>)。</p> <p>(結論) 診断時点での飲酒や過去の飲酒でも常習的かつ大量の飲酒は結腸直腸癌の危険を増加させる。断酒はその期間に依存して、その危険を減少させるのに有効であるかもしれない。</p>	